第９課　感謝の献げ物

【暗唱聖句】

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」ヨハネ3:16

【今週のテーマ】

今週は、神様にささげることを通して、それがわたしたちの信仰を育て、神様のご品性を反映させるための有効で手段であることを学びます。

【日曜日・あなたの富のあるところ】

「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ」マタイ6:19～21

イエス様は2つの富について語っています。一つは地上の富です。「虫」「さび」「盗人」という言葉が表しているように、地上の富の特徴は一時的であり、不安定で、安全でもありません。それに対してもう一つの富は天の富です。そこには「虫」「さび」「盗人」も存在しません。つまり永遠であるということです。イエス様はこの二つの富を対比させながら、わたしたちに天の富を蓄えるように教えられました。ところで、この富に関する教えの中で重要なポイントになってくるのは、イエス様が最後に言われた言葉の中にあります。「あなたの富のあるところにあなたの心もある」という言葉です。わたしたちの心がいつもどこに向けられているのか、この世の生活なのか、それとも永遠の御国すなわち神様に向けられているのか、それを知るバロメーターのような役割が富にはあるということです。

神様を信じていると告白しながら、この世の富を信じてそれを蓄えることに一生懸命であるとするなら、そこには大いなる矛盾があるわけです。献金に関していえば、それが直接的に天に富を積むことではありませんが、しかし、信仰によって心を天に向けて神様の御用のために献金をささげることは、目に見えない天に富を自然に積まれていくことにつながっていくことでしょう。

【月曜日・神の恵みの管理者たち】

「事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です」エフェソ2:8

神様はたくさんの恵みを与えてくださっています。わたしたちが拒みさえしなければ、天の無尽蔵の恵みの中で生きることができます。本来それを受けるに値しない私たちが、豊かな神様の恵みの中で生きることができるのは、神様に愛されているからにほかなりません。また神様の恵みの中で最大のものは、イエス・キリストそのものです。そのイエス・キリストを救い主として信じる人は誰でも救われるのです。これ以上の恵みはありません。

　ところで、わたしたちはこの「神の様々な恵みの善い管理者」（第一ペテロ4:10）と書かれてあります。つまり、恵みを一方的に受けて喜ぶだけでなく、このいただいた恵みを管理していくことが求められているのです。つまり、神様の命を無償でいただいたわたしたちは、この素晴らしい恵みの中に生き、良い証を立てながら、この神様の恵みをまだ知らない人に無料で分け与えていく、つまり伝え広げていくことが求められているわけです。

【火曜日・私たちの最上の献げ物】

「この町に一人の罪深い女がいた。イエスがファリサイ派の人の家に入って食事の席に着いておられるのを知り、香油の入った石膏の壺を持って来て、後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った」ルカ7:37～38

この罪深い女（マリヤ）は、かつてイエス様から悪霊を追い出してもらい、救われた経験を持っていました。その感謝を、涙とともに、高価なナルドの香油を大量にイエス様の足にそそぎという形で表しました。この行為を勿体ないと批判する人もいましたが、これは彼女なりのイエス様に対する感謝の気持ちの表れなのでした。イエス様はこの女性にこう言われました。

「だから、言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」ルカ7:47

イエス様は彼女の大胆にも思えるような行為の中に、多くの罪を赦されたのだという自覚とそれに対する感謝、そしてイエス様に対する愛があるといわれました。わたしたちのささげものの中に、イエス様は私たちの心や思いを見て下さり、それを受け止めてくださいます。神様を第一にするとき、自分たちができる最上のものをささげたいという思いになることでしょう。そのささげものの中に、その人の神様に対する愛が表れているのです。

【水曜日：心の動機】

「イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。そして、ある貧しいやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見て、言われた。「確かに言っておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」ルカ21:1～4

神様は人の外側ではなく内側、すなわち心を見られる方です。従って、献金をささげる場合も、献金額ではなく、心の中、つまり献金をささげる動機を見られます。このやもめは献金の額は少なかったけれども、乏しい中から生活費全部を入れたと言われました。彼女にとってそれは簡単なことではなかったはずです。しかし、彼女の心がささげることを望んだのです。そして、それは神様にしっかり届きました。

「あなたがたの現在のゆとりが彼らの欠乏を補えば、いつか彼らのゆとりもあなたがたの欠乏を補うことになり、こうして釣り合いがとれるのです。「多く集めた者も、余ることはなく、わずかしか集めなかった者も、不足することはなかった」と書いてあるとおりです」第二コリント8:14、15

献金は神様におささげするものですが、実際に神様がお金を必要としているわけではありません。献金は神様の働きを推進するための資金として用いられたり、貧しい人の生活を支えたりします。それが神様の御心に一致している限り、神様にささげたのと同じとなるわけです。また、パウロは献金をささげることで、信者一人ひとりの生活が「釣り合いがとれる」ことを推奨しています。これを可能とするのは神様と人に対する「愛」です。

【木曜日・与える経験】

神様はわたしたちが神の子として正しく成長することを望んでおられます。そのために私たちにとって利益となることをお求めになります。その中の一つに献金もあるわけです。私たちがささげるとき、それを受ける人だけでなく、ささげる人もたくさん利益を得ます。いやむしろ、与える人のほうが幸いなのです。

「つまり、こういうことです。惜しんでわずかしか種を蒔かない者は、刈り入れもわずかで、惜しまず豊かに蒔く人は、刈り入れも豊かなのです」第二コリント9:6

　「あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。」

 （使徒言行録20章35節）

また、「ああ、愚かな者よ、行いの伴わない信仰が役に立たない、ということを知りたいのか」（ヤコブ2:20）とあるように、信仰には行いが必要であることを聖書は教えています。その献金も信仰による行いです。ささげるという行為を通して、わたしたちの信仰はさらに育っていくことを覚えたいと思います。